

# パワフル・ナレッジ (powerful knowledge) 論の生成と 展開に関する教科教育学的覚書 －地理教育からの書誌学的アプローチ－

志 村 喬\*

(令和2年1月31日受付；令和2年4月6日受理)

## 要 旨

イギリスの教育社会学者M. ヤングが2010年頃から提起しているパワフル・ナレッジ論は、教育社会学界のみならず筆者が専攻する地理教育界でも国際的論題になっている。本稿は、筆者が専門とする教科教育学の視座から、同論の生成・展開を書誌学的に分析した。その結果、第1にパワフル・ナレッジ概念の源泉は、新しい教育社会学における知識観へのヤングの自己批判的省察であり、社会構築主義ではなく社会実在主義に基盤をおいた知識観への転換であること。第2に、その新しい知識観を表す言葉がパワフル・ナレッジであり、この言葉はヤング自身が1970年代初頭に新しい教育社会学を提唱した時に提起した権力的な知識との対比であるものの、オーストラリアにおけるコンピテンシーベースの教育を厳しく批判した2007年のウィーラン論文が使用としては嚆矢であり、ヤングの使用は2008年論文であること。第3に、ウィーランが職業教育専攻のように、パワフル・ナレッジは職業教育分野での受容・展開が先行していたこと、が見いだせた。

## KEY WORDS

subject education 教科教育, vocational education 職業教育, sociology of education 教育社会学, knowledge in curriculum カリキュラムにおける知識, Michael F. D. Young マイケル F. D. ヤング

## 1 はじめに－問題意識－

筆者が研究してきたイギリス地理教育・社会系教科教育界では、学校カリキュラム、授業づくり、教員養成等を論じる際にパワフル・ナレッジ (powerful knowledge)<sup>1)</sup>論が2010年以降参照されるようになり、同論を基盤にした国際協働的な地理教育研究活動が現在は進展している (ランバート, 2017; 志村ほか, 2017)。そしてこのパワフル・ナレッジ論は、教科教育論に限らず、職業・継続教育論や教育社会学における知識論でも国際的論題になっている。このような国際研究動向からは、パワフル・ナレッジなる知識観を基軸に、教科教育、教科内容、職業・継続教育、教員養成、教育政策が関連しながら、学校教育の在り方を学際・協働的に論究していることが分かる。しかし、このような研究動向に関する日本の教育界での言及は少ない。教科専門と教科教育の協働が強く求められている日本の現状を踏まえた場合、授業で扱う知識 (教授学習内容) は両者を繋ぐ中核であり、パワフル・ナレッジ論を探究する意義は大きい。

## 2 日本におけるにおけるパワフル・ナレッジ (powerful knowledge) 研究の現段階

パワフル・ナレッジは、イギリスの教育社会学者Michael F. D. Youngが、賛同する研究者らと2010年前後から提唱している学校カリキュラムにおける知識概念であり、同概念を焦点として議論されている学校カリキュラムにおける知識論がパワフル・ナレッジ論である。最初に日本での同論の研究状況を確認する。

周知のようにヤングは、イギリスにおける「新しい教育社会学」の幕開けを告げた*Knowledge and Control: New directions for sociology of education* (『知識と統制：教育社会学の新しい方向』Young ed. 1971) の編者として若く

\*人文・社会教育学系 (社会系分野)

して鮮烈な学界デビューを果たし、教育社会学の旗手となった。同書における氏のキーワードは、「knowledge of powerful (権力的な知識)」であり、イギリスの学校教育カリキュラムで自明視されてきた教授すべき知識(教科内容知識)が擁している社会権力性・社会構築性を暴き、カリキュラムに関する新しい知識観を教育社会学の視座から提起したものであった。この権力的な知識論は、進歩主義・生徒中心主義教育論や批判教育学、さらにはポストモダンニズ的な教育学といった思潮と結びつきながら、イギリスのみならず日本含め世界的に大きな影響を与え続けてきた。一方、氏のその後の思想遍歴は、ほとんど学術的注意が払われない期間が続き、とりわけ日本ではそれが長く続いたと思われる。

そのような期間が継続した日本において、氏の思想転換を初めて指摘したのは天童・石黒(2012)「M.ヤングの知識論再考－「新しい」教育社会学から「知識を取り戻す」へ－」である。同論文は、Young(1998) *The Curriculum of the Future* (『未来のカリキュラム』)<sup>2)</sup>を経て公刊されたYoung(2008b) *Bringing Knowledge Back In* (『知識を取り戻す』)が、1970年代採用していた社会構築主義知識観から社会実在論(主義)知識観へ転換したことを的確に指摘したもので、ヤングの思想転換を日本へ初めて報告しその論理を検討した貴重な論考であった。一方、ヤング自身が同書籍で明示的にパワフル・ナレッジを用いていないことから、同論文ではこれへの言及はみられず、パワフル・ナレッジの日本での本格的な検討は柳田(2015)を待つこととなった。その後は、柳田を中心とした研究者らにより、教育社会学会・カリキュラム学会で研究成果が発表されるとともに、ヤング自身の論考も邦訳論文(ヤング, 2017)・原著論文(Young, 2018)双方が学会誌に掲載された。

他方、教育社会学・カリキュラム学界とは別に、地理・社会系教科教育界では、イギリス地理教育研究進展の過程でパワフル・ナレッジに繋がる研究が始動した。イギリスにおける地理教育論争を検討しケイパビリティ論とカリキュラムメイキング論を論じた伊藤(2012)、ケイパビリティ論とカリキュラムメイキング論の基底にあるヤングの知識観を論じた志村(2013)、パワフル・ナレッジ論を地理教育に積極的に導入しているイギリスの地理教育研究者ランバートの来日講演論文(Lambert, 2104)及びその解説論文(伊藤, 2014)の公刊である。

このように当初は両学域で個別に始まったパワフル・ナレッジ研究であったが、日本カリキュラム学会2017年大会の課題研究Ⅱ「今日のカリキュラム改革と公教育のあり方」における教科教育研究からのパワフル・ナレッジに関する報告(志村, 2018a)、2018年大会における連名発表<sup>3)</sup>に象徴されるように、両学域の協働的研究へと現在発展している。この学際的な研究展開のなか、筆者は教科教育とりわけ地理教育の視座からパワフル・ナレッジについて概説的に論じたが(志村, 2018b)、他領域、とりわけヤングの専攻する教育社会学の文脈と関連付けた同論の生成・展開についてはほとんど触れていなかった。そこで本稿は、日本での研究状況を踏まえつつも、教科教育の視座からパワフル・ナレッジの系譜に関する他領域の文献を通史的に整理し、その展開状況を明らかにすることを目的としている。教育社会学ではなく、教科教育学とりわけ地理教育を専門とする筆者が収集した他領域文献が対象になることから<sup>4)</sup>、本稿は地理教育・社会科教育の視角からのパワフル・ナレッジ論ではある。しかし、これまでの研究を補足する意義とともに、普遍的・汎用的な世界標準化が進むグローバルな教育改革において教科教育の本質を照射する意義があると考えられる。

### 3 パワフル・ナレッジの展開－書誌学的分析－

研究方法として本稿は、地理教育研究者である筆者が渉猟したパワフル・ナレッジに関する文献を書誌学的に整理した表1をもとに、パワフル・ナレッジ論の提起とその背景、さらに同論の普及・拡張について分析し検討する。なお、雑誌・書籍刊行年が近似する場合には、執筆時期の前後関係が不明であることから、通時的な厳密性よりも研究展開の文脈を重視した検討となる。

#### 3. 1 『知識を取り戻す』(2008)における知識観転換の象徴としてのパワフル・ナレッジ

パワフル・ナレッジなる概念・用語は、柳田ら(2108)が報告したように2007年のウィーラン論文(Wheelahan, 2007)を端緒とする。一方、ヤングの知識観の転換を学界へ広く知らしめた『知識を取り戻す』は翌年の2008年に刊行されたもので、Young(2000)からはじまる氏の2007年までの諸論文を集成したものである。同書籍では、2007年のウィーラン論文が刊行予定として文献記載されているものの、パワフル・ナレッジは索引に収録されておらず、用語としての明確な記述も筆者が読んだ限りではみられない。

表1 パワフル・ナレッジ関連主要文献年表

年	ヤングの主要著作	他者の関連著作
1971	『知識と統制』	
1998	『過去のカリキュラム・未来のカリキュラム』	
1999		モア&ムラー「教育社会学における'声'言説と知識・アイデンティティの問題」
2000	「極端な声言説から教育知識の社会学を救う：カリキュラムの社会学の新しい理論的基礎に向けて」	
2007		ウィーラン「コンピテンシーを基礎としたトレーニングは労働者をパワフルな知識から閉め出す方法：修正バーンステイン分析」
2008	「カリキュラムの社会学における構築主義から実在主義へ」、掲載雑誌『教育研究レビュー』特集「教育の場で知識とみなされるもの：学問的知識、評価、そしてカリキュラム」	
	『知識を取り戻す：教育社会学における社会構築主義から社会実在主義へ』	
2009	「カリキュラム理論と知識の問題：個人史と未完のプロジェクト」、所収書籍『カリキュラム研究のリーダー達』	
	「学校は何のため?」、所収書籍『知識、価値、そして教育政策』	
	「教育、グローバリゼーション、そして知識の声」、掲載雑誌『教育と労働』特集「知識と労働」/ウィーラン「コンピテンシーを基礎としたトレーニング(CBT)の問題：そして構築主義が事態を悪化させる理由」、ムラー「知識の形式とカリキュラムの一貫性」	
2010	「経験と知識とを教育者が区別しなければならない理由」/「知識社会での教育の未来：教科を基盤とするためのラディカルなケース」、掲載雑誌『太平洋・アジア教育』特集「知識とカリキュラム」	
	「知識社会にむけたオルタナティブ教育の諸未来」	ウィーラン『カリキュラムにおいて知識が重要な理由：社会実在主義的議論』
	「未来への3つの教育のシナリオ：知識社会学からの教訓」(ムラーと共著)、掲載雑誌『欧州教育誌』特集「グローバリゼーション、知識、そしてカリキュラム」	
	「教育社会学における知識の再概念化とカリキュラム」(モアと共著)、所収書籍『社会実在主義、知識、そして教育社会学：知性の連合』	
2011	「教科への回帰：社会的視座から14-19歳のカリキュラムへの英連立政権のアプローチについて」、掲載雑誌『カリキュラム・ジャーナル』特集「ナショナル・カリキュラムの20年を振り返る」	
2012		モーガン&ランバート「(地理教育特集号) 編者巻頭言」
		ホワイト「パワフル・ナレッジ：伝統カリキュラムへは薄弱すぎる?」
		ベック「パワフル・ナレッジ、難解な知識、カリキュラム知識」
2013	「カリキュラム理論の危機を克服する：知識を基盤としたアプローチ」、掲載雑誌『カリキュラム研究』特集「教科・領域教育」	
		デンング「プラクティカル、カリキュラム、理論と実践：シユワブプラクティカル1'の国際的対話」
2014	「カリキュラムとは何で、何ができるのか?」、掲載雑誌『カリキュラム・ジャーナル』特集「カリキュラムを創造する：目的、知識、そして統制」	
	「知識と未来の学校：カリキュラムと社会的公正」(ランバートと共編著)	
	「専門職の社会学から専門職知識の社会学へ」(ムラーと共著)、所収書籍『知識、専門的知識、そして専門職』(ムラーと共編)	
	「パワフル・ナレッジにおける諸パワーについて」(ムラーと共著)、所収書籍『知識とカリキュラムの未来：社会実在主義での国際研究』	
2015	「カリキュラム理論と知識への問い：6論文への応答」、掲載雑誌『カリキュラム研究』特集「マイケル・ヤング、知識、そしてカリキュラム：国際的対話」	
2016	『カリキュラムと知識の専門化：教育社会学における諸研究』(ムラーと共著)	
2017	「力あふれる知識」はすべての児童・生徒にとっての学校カリキュラムの基盤となりうるか」	
2018		ホワイト「パワフル・ナレッジの薄弱さ」
2019	「感謝と応答」、所収書籍『社会学、カリキュラム研究、そして専門職知識：マイケル・ヤングの業績に関する新しい見方』	
	「知識、権力、そしてパワフル・ナレッジの再訪」(ムラーと共著)、掲載雑誌『カリキュラム・ジャーナル』特集「知識への転回後?：政治とバダゴギー」	

注) 左右の欄にまたがるヤングの文献は、共著者がいる書籍もしくは雑誌特集号での論文

入手文献より志村作成 (2020.03)

筆者が、ヤングの諸論考のなかで確認したパワフル・ナレッジの初出は、同じ2008年にアメリカ教育研究学会誌『教育研究レビュー』32巻1号特集「教育の場で知識とみなされるもの：学問的知識、評価、そしてカリキュラム」に掲載された「カリキュラムの社会学における構築主義から実在主義へ」(Young, 2008a)である。本論文では、自身が1971年に提起した「権力的な知識」と対比させながらパワフル・ナレッジが提起・説明されている。一方、本論文内容は、印刷中として文献記載された著書『知識を取り戻す』(Young, 2008b)及び書籍『知識、価値、そして教育政策-批判的見方-』所収論文「学校は何のため?」(Young, 2009a)の内容によるとされている。このうち書籍所収論文(2009a)は、学校教育目的に照らした場合に求められる知識としてパワフル・ナレッジを2008年論文と同じように提起・説明している。そして、パワフル・ナレッジという新概念をより明確に発信した『太平洋・アジア教育』誌に掲載された2010年論文「経験と知識とを教育者が区別しなければならない理由」(Young, 2010a, p.11)において同概念の解説としてヤングが引用するのは2009年論文(2009a)の方である。

これらからすると、2008年書籍内容を固めているこの時期にヤングとしてのパワフル・ナレッジなる概念が形成され使用されるに至ったといえる。ただし、この時期にヤングが最も主張したかったことは、相対主義に陥っている社会構築主義知識観から、社会における知識実在性を認める社会実在主義知識観へ転換することの必要性である。パワフル・ナレッジの初出論文題目が「カリキュラムの社会学における構築主義から実在主義へ」であり、著書副題が「教育社会学における社会構築主義から社会実在主義へ」であることにそれは明示されている。そして、この転換を自身の1971年の著作で主張した「権力的な知識」をふまえて象徴的に示すものとして、2007年にウィーランが使用した「パワフル・ナレッジ」へ重ねて使用するようになったと考える<sup>5)</sup>。

### 3. 2 パワフル・ナレッジを基盤とした「未来3型カリキュラム」の提起

ヤングは2009年以降の諸論考においてパワフル・ナレッジを頻用するとともに、今後のカリキュラムの在り方についての展望を主張するようになる。先にふれた2010年の『太平洋・アジア教育』誌にはヤングの論文がもう1編収められており、題目は「知識社会での教育の未来：教科を基盤とするためのラディカルなケース」(Young, 2010b)である。この題目からうかがえるように、パワフル・ナレッジに基づく未来のカリキュラムは教科を基盤としたラディカルなカリキュラムに変わるべきという、学校教育で本来目指すべきカリキュラム像を本論文は主張する。そこで描かれているカリキュラム像は、学習者主導を促した進歩的教育や批判的教授学(ペダゴギー)のカリキュラムでない一方、保守的でもないカリキュラムであるラディカルな(根本的に変革された)カリキュラムであり、追従(compliance)を基礎としたカリキュラムモデル(伝統モデル)から、関与(engagement)を基礎としたカリキュラムモデルへの転換を目指すべきと提唱されている。

この目指すべき新しいカリキュラム像の模索・提唱は2009年9月のウィーン大学での欧州教育研究大会での基調講演をまとめた2010年論文(Young, 2010c)にもうかがえるが、明確に「未来3型カリキュラム」として提起したのはムラーとの共著2010年論文「未来への3つの教育のシナリオ：知識社会学からの教訓」(Young & Muller, 2010)である。本論文は、『欧州教育誌』でヤングがイェーツと編集した特集号に掲載されたもので、パワフル・ナレッジ論を基盤としたカリキュラム論が、欧州の教育界で広く議論される段階に入っていることを示している。その象徴はイギリス教育研究学会誌『カリキュラム・ジャーナル』2011年特集号(22巻1号)「ナショナル・カリキュラムの20年を振り返る」におけるヤング自身の論文寄稿(Young, 2011)及び同号掲載諸論文におけるヤングへの言及(例：Lambert, 2011)である。

### 3. 3 パワフル・ナレッジ論と未来3型カリキュラムをめぐる議論の国際的展開

2011年の『カリキュラム・ジャーナル』特集号以降、同誌をはじめとしたカリキュラム研究誌では、ヤングの提起するパワフル・ナレッジ及び未来3型カリキュラムに関する特集がしばしば組まれるようになる。時系列であげるならば、『カリキュラム・ジャーナル』次号(22巻3号)の地理教育特集号において、同特集号編者のモーガンとランバートは巻頭言(Morgan & Lambert, 2011)でヤングの論を援用し、地理教育におけるパワフル・ナレッジを基底とした議論が同号所収諸論文でなされる。2013年の『カリキュラム研究』45巻2号も、教科教育を主とした特集であり、ヤングの巻頭論文(Young, 2013)<sup>6)</sup>はカリキュラムの危機を克服するために知識を基盤にしたアプローチが必要であると主張している。さらに、同誌45巻5号(2013年)は、教育実践における知識の価値も重視したアメリカのカリキュラム研究者シュワブの特集であったが、シンガポールの研究者 Deng の巻頭論文(Deng, 2013)は同誌2号掲載の上記ヤング論文を引用し、パワフル・ナレッジ論をこれまで国際的に蓄積された学校カリキュラム論・知識論の中に位置づけようとしている。

一方、パワフル・ナレッジ論が注目されるなか、パワフル・ナレッジ概念の曖昧さと未来3型カリキュラムが孕む保守回帰への危険性から、教育社会学者の中からは厳しい批判意見も寄せられるようになった(White, 2012, 2018; Beck, 2013)。このような理論次元での議論は、2014年の『カリキュラム・ジャーナル』25巻1号の特集「カリキュラムを創造する：目的、知識、そして統制」(Wyse et al., 2014)、2015年の『カリキュラム研究』47巻6号の特集「マイケル・ヤング、知識、そしてカリキュラム：国際的対話」(Deng, 2015)で国際的に一層拡大し、グローバルな議論のなかでヤング自身も持論を展開している(Young, 2014, 2015)。これら特集号での論争内容の具体的検討は別稿を期すが、直近の重要文献であるヤングIoE在職50年記念書籍『社会学、カリキュラム研究、そして専門的知識：マイケル・ヤングの業績に関する新しい見方』(Guile et al. eds., 2018)<sup>7)</sup>及び『カリキュラム・ジャーナル』30巻4号(2019年)特集「知識への転回後?：政治とペダゴギー」(Hoadley et al., 2019)からは、ヤングのパワフル・ナレッジ論を基盤とした未来3型のカリキュラムは、教科教育・職業教育研究者のみならず、教育哲学者を含む幅広い教育学者から注目されている。そして、教科教育研究者や現場学校教員からは強く支持されている(Young & Lambert, 2014)。

## 4 パワフル・ナレッジ論提起の源流

### 4. 1 モアとムラーの批判論文(1999)へのヤングの応答論文(2000)

パワフル・ナレッジ論は未来3型カリキュラム提起まで展開したが、同論をヤングが提起した理由は、何であった

のであろうか。その源泉を、『知識を取り戻す』(2008b)の第一章として所収されたヤングの2000年の論文を一緒に探してみたい。

『イギリス教育社会学会誌』21巻4号に「極端な声言説から教育知識の社会学を救う：カリキュラムの社会学の新しい理論的基礎に向けて」と題して発表されたこの論文(Young, 2000)は、前年の同誌(20巻2号)に発表されたモアとムラーの共著論文「教育社会学における‘声’言説と知識・アイデンティティの問題」(Moore & Muller, 1999)<sup>8)</sup>への応答論文である。この共著論文は1970年代急速に広まった「新しい」教育社会学で一般化したマイクロな社会集団内で語られる「声」の言説分析的研究が、社会集団の多様性や個々の集団の固有性・独自性を過度に重視したため、教育社会学において知識が経験と同一視され、知識の認識論的構造に注意を払わない<sup>9)</sup>結果、知識相対主義に陥っていることを批判したもので、教育社会学における知識観の認識論的誤謬を厳しく指摘したものであった。この教育社会学批判論文についてヤングは後年、自身が社会実在主義の知識観に転換する契機であり(Young, 2008b, p.xv)、自分の南アフリカでの教育研究・指導体験に照らして極めてパワフルな批判であったと回顧(Young, 2009b, p.228)している。

実際、翌年に発表されたヤングのこの応答論文は、「ある種類の知識は、疑問なしに、他の知識よりパワフルである」というように批判論文の主要主張を認め、声言説(voice discourse)論は教育社会学を袋小路に追い込んでいるとの反省的見解を最初に記し、批判を基本的に受け入れることから始まっている。そして、過剰な声言説による相対主義及びモアとムラーが陥る危険のある非社会認識的実在主義(asocial epistemological realism)から知識社会学を救い出す方法を考案することが応答論文執筆の目的であると記すのである(p.526)。結論としては、専門家あるいは学問的な知識の価値を低下させるような教育社会学の傾向に対するモアとムラーの批判を真摯に受け入れなければならないとの認識を明確に示したうえで、教育の目的に立ち戻ったうえで教育社会学は知識の社会学理論について挑戦・討議しなければならない、教育政策・実践の現実や制約に教育社会学をより埋め込むことが必要であるということが過去30年間の新しい教育社会学の教訓であると結ぶのである(pp.533-534)。即ち、この応答論文では、社会実在主義にたつ知識観-知識の実在性を認めつつも知識への社会的批判が必須とする知識観-が明確に宣言され、後年のヤングは、モアやムラーと共同研究成果を続々と発表するのである(Young & Moore, 2010; Young & Muller, 2014a, b, 2016)。

#### 4. 2 職業教育研究界におけるパワフル・ナレッジ論の先行

社会実在主義に基盤をおいたヤングの主張がその後、パワフル・ナレッジ、未来3型カリキュラムへと展開したことは既述の通りであるが、パワフル・ナレッジなる語の初出が、オーストラリアのグリフィス大学で職業教育を主専攻領域とする教育社会学者ウィーランによる2007年の論文であったことには注意を払う必要がある。「コンピテンシーを基礎としたトレーニングは労働者をパワフルな知識から閉め出す方法：修正バーンステイン分析」と題されたウィーラン論文(Wheelahan, 2007)は、オーストラリアの職業教育で進行しているコンピテンシーベースの訓練は労働者階級がアカデミック諸学に代表されるパワフル・ナレッジへ接することを否定していることを問題視したものであった。具体的にはバーンステインの議論(Bernstein, 2000)を基盤にして、難解(esoteric)な知識は、「考えられない(unthinkable)」「まだ考えられていない(yet-to-be-thought)」層にある知識であるが故に潜在的に(potentially)パワフル・ナレッジなのであり、この難解な知識は権力の社会的分配に挑戦する潜在力(potential)を有していると最初に確認する。したがって、学問的知識の構成原理へ接することを生徒に否定することは、労働者階級やその他の不利な条件に置かれた社会集団が社会的潜在力を持つことを否定することであると告発することになるのである。ここの立論では、1999年のモアとムラーの教育社会学批判論文及び2000年のヤングの応答論文から始まった両者の知識に関する諸論文が引用されており、職業教育領域からパワフル・ナレッジなる概念がまずは生成されたことが分かる。

そして、職業教育領域におけるパワフル・ナレッジをめぐるの議論は、早くも2009年にイギリスの職業教育学会誌『教育と労働』<sup>10)</sup>22巻3号の「知識と仕事」特集に結実する。同特集号にウィーランは「コンピテンシーを基礎としたトレーニング(CBT)の問題：そして構築主義が事態を悪化させる理由」(Wheelahan, 2009)を執筆し、オーストラリアの職業教育でみられるコンピテンシーベースの教育が、生徒が実際に置かれる場でみられる社会的対話や論争に参加するために必要な知識へ接する生徒の権利を制限する貧弱な教育であると批判し、その原因を論じている。同特集に、ヤングは「教育、グローバリゼーション、そして‘知識の声’」(Young, 2009c)、ムラーは「知識の形式とカリキュラムの一貫性」(Muller, 2009)をそれぞれ寄稿している。また、ウィーランが2010年に刊行した書籍『カリキュラムにおいて知識が重要な理由：社会実在主義的議論』(Wheelahan, 2010)では、序章においてパワフル・ナレッジが取り上げられるとともに、ヤングが序文を寄せている。これらからは職業教育界では、いち早く国際的議論

が進んでいたことが理解される。

## 5 おわりにーパワフル・ナレッジ論の生成・提起・展開ー

パワフル・ナレッジの生成・提起・展開をグローバルな文脈にも注意を払いながら、簡単ではあるが書誌学的分析・検討を加えてきた。そこで得られた主な知見は次である。第1にパワフル・ナレッジ概念の源泉は、新しい社会学における知識観へのヤングの自己批判的省察であり、社会構築主義ではなく社会実在主義に基盤をおいた知識観への転換である。第2に、その新しい知識概念を表す言葉がパワフル・ナレッジであり、これはヤング自身が1970年代初頭に新しい教育社会学を提唱した時に提起した権力的な知識との対比であるが、オーストラリアにおけるコンピテンシーベースの教育を厳しく批判したウィーラン論文が用語使用としては嚆矢となる。第3に、ウィーランが職業教育専攻のように、パワフル・ナレッジは職業教育分野での展開が教科教育領域より先行していた。

これらを知って再度『過去のカリキュラム・未来のカリキュラム』を紐解くと天童・石黒（2012）が指摘したように、ヤングの日本語版への序文は極めて意味深い。原著の出版が1998年、邦訳出版が2002年であり、2000年をはさむこの期間は、モアとムラーの批判論文（1999）を受けヤングの新たな知識論が生成される途上であった。日本語版序文における「教育社会学は相対主義に陥るべきではない……相対主義からはいかなるカリキュラムの代案も生まれ得ることはできないからである。」（p. iv）、「「孤立化した」専門化と「関連し合う」専門化の類型をさらに発展させ、……より最近の論文では、私は専門化の社会的組織、とくに知識の獲得と生産における教科と学問の役割がもっと強調されるべきであると論じている（Young, 2001）。」（pp. viii - ix）との記述は、その後提起するパワフル・ナレッジと未来3型カリキュラムを示唆していたのであり、その提起・展開は既述の通りである。国際的論題となったこれら理論を、教科教育・教員養成でどのように受け取るかが、普遍的・汎用的な世界標準化が進むグローバル教育改革の渦中にある教育界にいる我々に一層問われていると考えるのは筆者だけであるまい。

## 謝辞

本研究においては、カリキュラム研究からヤングの知識論を考究している柳田雅明氏（青山学院大学）を中心とした研究グループ参加者及び2018-2019年度上越教育大学研究プロジェクト「大学院教員養成課程における社会系教科専門性育成の在り方に関する実証的基礎研究」（代表：下里俊行）参加者から示唆を得ることが多かった。ここに記し感謝申し上げます。なお、本稿内容は当然ながら筆者の判断・責任である。本研究の一部は、JSPS科研（基盤B）17H02695「ケイバビリティ論に基づく社会系教科教員養成・研修システムの国際共同開発と成果発信」（研究代表者：志村喬）の成果である。

## 注

- 1) 柳田ほか（2018）で述べたように“powerful knowledge”は訳語が定まっておらず論者によって「力強い知識」「力あふれる知識」等が用いられてきたため、本稿では「パワフル・ナレッジ」と表記する。
- 2) Young（1998）は、太田の尽力で2002年に邦訳が刊行されたが、その意義は天童・石黒（2013）まで十分に認識されていないように見える。
- 3) 柳田雅明・中野和光・志村喬・本田伊克・森岡修一（2018）の発表者の専門は、教育社会学・教育方法学・教科教育学と多様である。
- 4) 国際的な地理・社会系教育研究界においてパワフル・ナレッジ論を援用する文献は数多いが、志村（2018b）である程度ふれていることから本稿では扱わない。
- 5) Young（2008a）はWheelahan（2007）を文献で印刷中として記載していることから、「パワフル・ナレッジ」を用いたウィーラン論文を執筆時に認識している。
- 6) 同論文は、2012年3月のオーストラリア及び南アフリカでの講演、同年9月のブラジルでの講演をもととしている。
- 7) 本書はヤングのロンドン大学IoE就任50周年（2017年）を記念して編纂されたものである。編者は、IoEで職業教育を専門とするガイル、地理教育を専門とするランバート、理科教育を専門とするライスであり、専門分野的にも国際的にも幅広い寄稿者から成っている。
- 8) モアは英国ケンブリッジ大学、ムラーは南アフリカのケープタウン大学で教育社会学を専門とする研究者である。
- 9) p.191では、新しい教育社会学が「パワフルな知識の諸構造（powerful knowledge structures）や、それが事実・価値といった真実をつくり促進することから距離をおく」といった記述がみられる。
- 10) 雑誌『教育と労働』は1987年に創刊された雑誌であり、当時の職業教育・前職業教育は社会系カリキュラムにおけるクロスカリキュラムテーマの1つとしてあげられている（志村，2019）。

## 文献

- 伊藤直之 (2012): イギリスにおける地理カリキュラム論争—スタンディッシュとランバートの教育論に着目して—. 社会科学研究, 76, pp.11-20.
- 伊藤直之 (2014): ランバート論文の示唆するもの—パワフル・ナレッジに基づくカリキュラムと「ケイパビリティ・アプローチ」—. 社会科学研究, 81, pp.12-14.
- 志村 喬 (2013): イギリス地理教育界におけるケイパビリティ・アプローチ提唱の意味—知識と目標をめぐる議論の展開—. 日本社会科教育学会全国大会発表論文集, 9, pp.152-153.
- 志村 喬 (2018a): 保守連立政権における英国のカリキュラム政策—「知識」への回帰—. カリキュラム研究, 27, pp.51-52.
- 志村 喬 (2018b): イギリス教育界における「知識への転回」と教員養成: 地理教育を中心に. 松田慎也監修『社会科教科内容構成学の探求』, 風間書房, pp.212-234.
- 志村喬・山本隆太・広瀬悠三・金球辰 (2017): イギリス発「地理的見方・考え方」に気付く1枚の図—世界の地理教師たちとつくる新しい地理教材 第1回—. 地理, 62(6), pp.96-101.
- 志村 喬 (2019): イギリスにおける統合型教科「社会科」創設運動の盛衰—1970年代から1980年代を対象に—. 日英教育誌, 4, pp.40-59.
- 天童陸子・石黒万里子 (2012): M. ヤングの知識論再考—「新しい」教育社会学から「知識を取り戻す」へ—. 名城大学人文紀要, 47(3), pp.1-13.
- 柳田雅明 (2015): 「知識に基づくカリキュラム」を今日提起する意義とは—「カリキュラムの社会学者」マイケル・F・D・ヤングの近論から—. 青山学院大学教職研究, 1, pp.115-125.
- 柳田雅明・中野和光・志村喬・本田伊克・森岡修一 (2018): カリキュラム理論におけるpowerful knowledge—その歴史的背景そして展開・拡張—. 日本カリキュラム学会第29回大会(北海道教育大学旭川校)発表資料.
- ヤング, M. [菅尾英代訳] (2017): 「力あふれる知識」はすべての児童・生徒にとっての学校カリキュラムの基盤となりうるか. カリキュラム研究, 26, pp.91-100.
- ランバート, D. [広瀬悠三・志村喬訳] (2017): 地理の教室では, 誰が何を教えるのか?—力強い学問的知識とカリキュラムの未来—. 新地理, 65(3), pp.1-15.
- Beck, J. (2013): Powerful knowledge, esoteric knowledge, curriculum knowledge. *Cambridge Journal of Education*, 43(2), pp. 177-193.
- Bernstein, B. (2000): *Pedagogy, symbolic control and identity: Theory, research critique, 2nd ed.* Roman and Littlefield.
- Deng, Z. (2013): The practical, curriculum, theory and practice: an international dialogue on Schwab's the 'Practical 1'. *Journal of Curriculum Studies*, 45(5), pp.583-590.
- Deng, Z. (2015): Michael Young, Knowledge and curriculum: an international dialogue. *Journal of Curriculum Studies*, 47(6), pp.723-732.
- Guile, D., Lambert, D. & Reiss, M. eds. (2018): *Sociology, Curriculum Studies and Professional Knowledge: New Perspectives on the Work of Michael Young.* Routledge.
- Hoadley, U., Sehgal-Cutbert, A., Barrett, B. and Morgan, J. (2019): Editorial; After the knowledge turn? politics and pedagogy. *The Curriculum Journal*, 30(2), pp.99-104.
- Lambert, D. (2011): Reviewing the case for geography, and the 'knowledge turn' in the English National Curriculum. *Curriculum Journal*, 22(2), pp. 243-264.
- Lambert, D. (2014): Curriculum thinking, 'Capabilities' and the place of geographical knowledge in schools. 社会科学研究, 81, pp.1-11.
- Morgan, J. & Lambert, D. (2011): Editors' introduction. *Curriculum Journal*, 22(3), pp. 279-287.
- Muller, J. (2009): Forms of knowledge and curriculum coherence. *Journal of Education and Work*, 22(3), pp. 205-227.
- Moore, R. & Muller, J. (1999): The discourse of 'Voice' and the problem of knowledge and identity in the sociology of education. *British Journal of Sociology of Education*, 20(2), pp.189-206.
- Wheelahan, L. (2007): How competency-based training locks the working class out of powerful knowledge: a modified Bernsteinian analysis. *British Journal of Sociology of Education*, 28(5), pp. 637-651.
- Wheelahan, L. (2009): The problem with CBT (and why constructivism makes things worse). *Journal of Education and Work*, 22(3), pp.227-242.
- Wheelahan, L. (2010): *Why Knowledge Matters in Curriculum: a social realist argument.* Routledge.
- White, J. (2012): Powerful knowledge: too weak a prop for the traditional curriculum? *New Visions for Education Group*, posted 14 May. Online.  
[www.newvisionsforeducation.org.uk/about-thegroup/home/2012/05/14/powerful-knowledge-too-weak-a-prop-for-the-traditional-curriculum/](http://www.newvisionsforeducation.org.uk/about-thegroup/home/2012/05/14/powerful-knowledge-too-weak-a-prop-for-the-traditional-curriculum/) (2020年1月29日)
- White, J. (2018): The weakness of 'powerful knowledge'. *London Review of Education*, 16(2), pp.325-335.

- Wyse, D., Hayward, L., Livingston, K. & Higgins, S. (2014): Editorial; Creating curricula: aims, knowledge and control. *The Curriculum Journal*, 25(1), pp.1-6.
- Young, M. ed. (1971): *Knowledge and Control: New directions for sociology of education*. Collier-Macmillan.
- Young, M. (1998): *The Curriculum of the Future: From the 'New Sociology of Education' to a critical theory of learning*. Falmer Press. [ヤング, M. F. D. 著; 大田直子監訳 (2002): 『過去のカリキュラム・未来のカリキュラム－学習の批判理論に向けて－』東京都立大学出版会]
- Young, M. (2000): Rescuing the sociology of educational knowledge from the extremes of voice discourse: towards a new theoretical basis for the sociology of the curriculum. *British Journal of Sociology of Education*, 21(4), pp.523-536.
- Young, M. (2008a): From constructivism to realism in the sociology of the curriculum. *Review of Research in Education*, 2008, 32(1), pp.1-28.
- Young, M. (2008b): *Bringing Knowledge Back In: From social constructivism to social realism in the sociology of education*. Routledge.
- Young, M. (2009a): What are the schools for?. in Daniels, H. Lauder, H. & Porter, J. eds. *Knowledge, Values and Educational policy: A critical perspective*. Routledge, pp.10-18.
- Young, M. (2009b): Curriculum theory and the problem of knowledge: a personal journey and unfinished project. in Short E.C. & Waks, L.J. eds. *Leaders in Curriculum Studies: Intellectual self-portraits*. Sense. pp.219-230.
- Young, M. (2009c): Education, globalization and the 'voice of knowledge'. *Journal of Education and Work*, 22(3), pp.193-204.
- Young, M. (2010a): Why educators must differentiate knowledge from experience. *Pacific-Asian Education*, 22(1), pp.9-20.
- Young, M. (2010b): The future of education in a knowledge society: the radical case for a subject-based curriculum. *Pacific-Asian Education*, 22(1), pp.21-32.
- Young, M. (2010c): Alternative educational futures for a knowledge society. *European Educational Research Journal*, 9(1), pp.1-12.
- Young, M. (2011): The return to subjects: a sociological perspective on the UK coalition government's approach to the 14-19 curriculum. *Curriculum Journal*, 22(2), pp.265-278.
- Young, M. (2013): Overcoming the crisis in curriculum theory: a knowledge-based approach. *Journal of Curriculum Studies*, 45(2), pp.101-118.
- Young, M. (2014): What is a curriculum and what can it do?. *The Curriculum Journal*, 25(1), pp.7-13.
- Young, M. (2015): Curriculum theory and the question of knowledge: a response to six papers. *Journal of Curriculum Studies*, 47(6), pp.820-837.
- Young, M. (2018): Can 'powerful knowledge' be the basis of a school curriculum for all the pupils. *カリキュラム研究*, 27, pp.71-76.
- Young, M. & Lambert, D. (with C. Roberts & M. Roberts) (2014): *Knowledge and the Future School: Curriculum and social justice*. Bloomsbury.
- Young, M. & Moore, R. (2010): Reconceptualizing knowledge and the curriculum in the sociology of education. in Maton, K. & Moore, R. *Social Realism, Knowledge and the Sociology of Education: Coalitions of the mind*. Continuum. pp.14-34.
- Young, M. & Muller, J. (2010): Three educational scenarios for the futures: lessons from the sociology of knowledge. *European Journal of Education*, 45(1), pp.11-27.
- Young, M. & Muller, J. (2014a): From the sociology of professions to the sociology of professional knowledge. in Young, M. & Muller, J. eds. *Knowledge, Expertise and the Professions*. Routledge. pp.3-17.
- Young, M. & Muller, J. (2014b): On the powers of powerful knowledge. in Barrett, B. & Rata, E. eds. *Knowledge and the Future of the Curriculum: International studies in social realism*. Palgrave. pp.41-64.
- Young, M. & Muller, J. (2016): *Curriculum and the Specialization of Knowledge: Studies in the sociology of education*. Routledge.

# A subject educational note on the generation and development of Powerful Knowledge theory: A bibliographical approach from geography education

Takashi SHIMURA \*

## ABSTRACT

The “powerful knowledge” theory, proposed by the British sociologist of education M. Young since around 2010, has become an international topic not only in geography education, but also in vocational/further education, subject education and sociology of education. This paper bibliographically analyzes the generation and development of the theory from a viewpoint of the subject education that I specialize in, and obtained the following findings.

First, the source of “powerful knowledge” concept is Young’s self-critical reflection on knowledge in the new sociology of education, and the shift to a social realism-based, rather than social constructionist, view of knowledge. Second, “powerful knowledge” is a term for the new concept of knowledge, as opposed to the “knowledge of power” proposed by Young himself when he devised a new sociology of education in the early 1970s. But the first use of “powerful knowledge” is Wheelahan’s 2007 paper, which severely criticizes competency-based education in Australia, and Young’s use is from 2008. Third, as indicated by Wheelahan’s major in vocational education, “powerful knowledge” found that use/development in the field of vocational education preceded the field of subject education.